

トゲの痒み

—フィリピン 貧困世帯向け条件付き現金給付プログラム（4Ps）の日常—

白 石 奈津子*

いつもと変わらない朝。軒先でひとりコーヒーを飲んでいると、ステイ先のサリサリストア（小雑貨店）に近所の少年が買物にきた。家の人は裏で洗濯をしていたため、私が応対に出る。

少年に品物とつり銭を渡しながら私は、なぜ今日は学校に行っていないのか尋ねた。彼は素っ気ない様子で「今日は休めって父さんが、4Ps の FDS（Family Development Session）があるから、弟がひとりになるからさ」と答え、家に帰って行った。

少年の母親は、ひと月ほど前、家政婦として中東に旅立った。今年中等学校を卒業する彼は、5 人兄弟の長男として、父親が不在の際は 2 歳になる弟の面倒をみななければならない。頻繁に休んでいるわけではないとはいえ、成績も優秀と聞く彼がこうして家族の為に学校を欠席していることに、腑に落ちない気分になる。

現金給付プログラム 4Ps（フォーピース）

4Ps とは、フィリピンの貧困世帯向け条件付き現金給付プログラムであり、フィリピン語の名称「Pantawid Pamilyang Pilipino Program」（フィリピンの家族のための橋渡

しプログラム）の頭文字をとってそう呼ばれる。社会開発福祉省（DSWD）を主体に、子どもの教育と保健衛生に関する意識の向上及び補助の供与、コミュニティ活動の活性化などを理念として提供される。受給対象世帯には、道徳講話や生活に関するレクチャーの受講、各種保険診断の受診等が義務付けられており、これを怠ると子ども 1 人あたりの満額支給額 800 ペソ（月額）からペナルティとして減額を受ける。先述の FDS への参加は重要な評定項目のひとつであり、その他、子どもの出席日数や定期健康診断の記録などから減額分を算出し、実際の支給額が決められる。関 [2013] によれば、4Ps は前アキノ政権下における貧困緩和政策の目玉のひとつ



写真 1 FDS の様子

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

であり、2012 年度の国家総予算 1 兆 8,160 億ペソ（約 4.7 兆円）のうち、395 億ペソ（約 1,027 億円）が 4Ps 向けに支出された。

一方この制度は「現金のばらまき政策であり貧困世帯の依存性を助長する」などとして、野党政治家や専門家など各所からの批判を受ける [関 2013]。

日常の中の 4Ps

私の調査先である東ミンドロ州では、このプログラムが 2011 年から提供されている。制度そのものに対する批評は既刊の諸論文に譲ることとし、今回私は「いかに人々の生活に 4Ps が入り込んでいるか」ということを記したいと思う。

たとえば、冒頭のエピソードが示すように、受給世帯の人々は、何を差しおいても FDS には出席しなければならない。だが、他にもマイクロファイナンスのミーティングや仕事を抱える受給者も少なくなく、FDS の開催日や主催者側による杜撰な時間管理の問題は、受給世帯員から日々、批判と噂的となっている。

ある 50 代女性は「最近は子どもを叱る時に安易に叩くことができなくなった。DSWD にみつかったら 4Ps から外される」と酒の席で話してくれた。また、フィリピンでは通夜の際に賭場が開かれるのが常なのだが、各種ギャンブルも 4Ps で禁止されている。別の 30 代女性は、近所の通夜の場合にて「誰かが 4Ps に密告するかもしれない」と繰り返しつぶやきつつ、ゲームの開かれているテーブルに近づいたり離れたりしながら、もどかしそ

うにみていた。その他の人々は「DSWD に密告する奴はいないな!」「4Ps から外されるぞ!」と大声で笑い合いながらゲームを続けていた。

またある時、別の DSWD 関連のプロジェクトのミーティングが開かれた。このプロジェクトに関しては、住民の関心が薄く、常々ミーティング出席者が少ないことに担当者が心を痛めていた。だがある日のミーティング前に「4Ps の受給世帯は必ず出席すること」という旨の通達が噂話のように流された。同じ DSWD のプロジェクトとはいえ 4Ps とは本来何の関係もないはずだが、その日のミーティングには会場から溢れるほどの人が参加した。「こういう風に 4Ps を利用するのは禁止されているはずなのに」と皆口々に不満を漏らした。

商売の場面でも 4Ps の話は頻出する。化粧品などの訪問販売をする女性は「もうすぐ 4Ps の現金給付日なのだから（買ってしまいなさいよ）」と購入を促す。逆に購入者の側から「来週が給付日だから、とりあえず掛買いさせてほしい」と頼む場面も度々目にした。

ここに書き尽くすことはできないが、他にも、給付対象世帯の選定や、給付金の使い道、伝統医療と保健センター受診義務の兼ね合いなど、日々の噂話の中に 4Ps の話題は尽きない。そして人々は「だって 4Ps でそう決められているから…」と繰り返す。

現金給付日の賑わい

4Ps に関連して人々が最も活気づくのは、やはり現金給付日である。都市部においては

ATM を通じた現金の給付が義務付けられているが、私の生活するような地方では、指定日に町の体育館にて手渡しで支給される。

公式には「Pay out day」と呼ばれる現金給付日を、人々は「サホッド¹⁾（給料）の日」と呼ぶ。その日には、町中の27のバランガイ（行政村）から全ての受給者が集合する。行政府のある建物に面した広場から車道にかけては、スナックや飲み物、子ども用のおもちゃを売る出店が立ち並び、さながらフィエスタ（祭り）のような賑わいを呈する。人々は、バランガイごとに色分けされたユニフォームに身を包み、立ち話をしながら自分たちの給付順がまわってくるのを待つ。そうした人々の間を、揃いのジャケットを着た携帯電話会社の販売員が、SIMカードを売ってまわっている。

ふと呼ばれて振り返ると、馴染みの行商の女性がいた。町から離れたバランガイを拠点にしている彼女だが、この日は借金回収のため

にわざわざ町まで出向いてきていたという。

さて、私の暮らすバランガイは、町の中心部に比較的近いこともあってか順番が後回しにされ、なかなか給付が始まらない。昼近くになってようやく呼ばれたらしく、揃いのライトブルーのTシャツを着た人々が、ずらずと列を作って体育館の中に消えていった。

手持ち無沙汰になり体育館の入り口をひとりうろついていると、既に給付を終えた山の方のバランガイ出身の友人に会った。彼らは貸し切りのジープで町まできたという。他にすることもなかったため、そのジープの所まで友人について行く。ジープでは平日にもかかわらず、親についてきた子どもたちがめいめいに寛いだり遊んだりしていた。

ここで、給付金の一部を小遣いにもらったという少女が、新しい下着を買いに市に行こうと誘ってくれた。この町では毎週水曜日に市がたつのだが、4Psの現金給付日には曜日にかかわらず市がたつ。

市に着くと、そこは既に色とりどりのユニフォームを着た人々でごった返していた。人々は受け取ったばかりの現金を手に、サンダルや服、日用品などを物色している。ビニール袋いっぱい購入した物品を抱えた人もいた。

人込みで連れの少女をふと見失った。探していると、少し離れた店先からこちらに手を振っているのがみえた。かけよってきた彼女は、にやにやしながら私の耳元に顔を寄せ「こういう日は泥棒が出るから気をつけない



写真2 現金給付を待つ列に並ぶ人々

1) サホッドという語は給料も意味するが「(広げた手で)落ちてくるものを受け止める」という語感をもつ。たとえば、災害時に配布される支援物資はサホッドであり、天水田耕作を可能にする恵みの雨を人々は「サホッド・ウラン」と呼ぶ(ウランは雨の意)。



写真3 ユニフォーム姿で市を巡る人々

と」と言った。

ふたりでジープに一度戻り、今度は親戚を探しているという別の友人について行く。少し離れた駐車場の隅で親類をみつけた彼女は、二言三言話をしてから私の方へ戻ってきた。「借金させてって頼んだのだけど嫌だって。ケチ」と話す彼女に、恐る恐る、なぜ今日借金を申し込んでいるのか聞いた。すると「今日もらったお金は、お米を買った借金の返済で全部なくなったから、今日から使う分を借りて回っているの」と教えてくれた。

彼女と別れた後もひとりで市をふらついていると、給付待ちをしていた連れの女性からテキストメッセージが入っていた。“やっと終わった。どこにいる？”それに返信する前に、子ども用のサンダルと短パンの入った袋を提げた彼女をみつけた。私に気が付くと彼女は、昼下がりの熱気に少し疲れた顔で言った。「帰ろうか。おかずになるものを買ってから。」

その日は1kgの骨付き肉を買って帰った。

おわりに

4Psが政権の人気取りのバラマキ政策であるという批判は、一側面として否定しがたい。特に、先日行なわれた6年に一度の大統領選挙戦において、キャンペーンを訪れる候補者たちは4Psの話を持ち出し、与党公認候補への投票を呼びかけた。こうした呼びかけはDSWDの派遣したスタッフからも聞かれた。だが、人々がそれに喜んで応じることはあまりなく、苦々しげな表情をする人さえ目にした。

実際、4Psがもたらす現金は、批判されるようにそれに過度に依存し得るものでもない。だが少なくとも、私の調査先のような地方農村において、4Psがもたらす現金は生活の一部となっており、人々はその存在を日々気にしている。他方で、プログラムが目指す人間開発の成果や、それをもたらす為の強制力の程を、はっきり肯定することも難しい。人々は日々4Psのことを口にしながらも、子どもを叩いて叱り、時間のある時には親しい人々とギャンブルをして過ごす。子どもはすぐに学校を休むし、病気にかかった時は、まず伝統医のもとへ行く。

そうした様をみていると、4Psが示す数々な「訓示」は、人々にとって指に刺さった小さなトゲのようなものではないかと思えてくる。放っておくにもチクチクと気にかかり、かといって取り除くのもひどく億劫だ。だが、そんなトゲの「痒み」でも、じわりじわりと日々の生活に影響していくのである。

引用文献

関 恒樹, 2013, 「スラムの貧困統治にみる包摂

と非包摂—フィリピンにおける条件付現金給付の事例から」『アジア経済』54(1): 47-80.

人をつなぐ食

池 邊 智 基 *

太鼓の音が村中に鳴り響く。強い直射日光を受けつつ畑の除草をして疲れきった身体が、塩辛い食事を求めている。畑から少し距離はあるが、村のみんなが集まる場所へと足を運ぶ。太鼓の音を聞いて、近所の子どもたちも走って同じところへと向かう。 *Bakk na añ kay!* (昼ごはんの太鼓が鳴ったぞ!) 遠くから私に知らせようと子どもたちが叫ぶ。¹⁾ 一今行くよと声を返して、少し足を早める。

私が調査をしているセネガル北部のN村では、村人全員が1ヵ所に集まって朝昼晩の食事をするという不思議な風習がある。マラブー (イスラーム指導者、聖者) でもある村長の家の前に皆で、100人を超える村人が集い、男は木の下に、女はトタン屋根の下に座り、毎回の食を共にするのだ。この村独特の風習に、1ヵ月も滞在したところで少しずつ慣れてきた。

セネガルの食事は、たいてい共食という形をとる。大きな盥 (たらい) のような皿に

米やクスクスを主とした6〜7人分の食事が入っており、車座に皿を囲んで食べる。日本では「同じ釜の飯」を各々の茶碗に移して食べるが、セネガルでは釜から大皿へと移し替え、大皿を囲んで各々が手づかみで一口大に丸めて食べる。家族の数が多ければ、大皿の数が2つ、3つと増える。家長の父から先に食べるというのが通例であり、父が食べ始めると家族の食事は始まる。

たいてい、ひとつの世帯で用意される大皿は1枚〜3枚程度である。N村では100人



写真1 N村の食事前の風景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 文中のウォロフ語はすべて、Jean-Léopold Diouf, 2011. *Dictionnaire wolof-français*. Karthara の表記に従い、日本語訳は筆者が行なった。